

トップインタビュー 大競争時代の鉄鋼経営

日本精線

新貝 元社長

— 新型コロナが及ぼした影響、ステンレス鋼線や金属繊維など主力製品の足元の状況は。

「新型コロナの発生・感染拡大により、当社の受注量は5、6月、出荷量は7、8月が底になるだろう。下期からの回復に期待しているが、先行きは不透明だ。製品別に見ると、17、18年と非常に堅調だったステンレス鋼線は足元苦戦している。米中貿易摩擦や英国のEU離脱など貿易環境の悪化を背景に土木、建築、産業用機械、家電・弱電向けが減少。また好調だった自動車向けの需要もコロナ禍で大幅に減少した。今上半期は自動車関連需要が半減するという前提で、ステンレス鋼線の上期の販売数量をタイ精線と合わせて前年同期比19%減の月産平均2660トと計画したが、建築用や産機向けの動向次第ではさらに下回る可能性もある」

「一方、金属繊維はおおむね好調だ。スマホや半導体装置用



の最終年度となる。

「18年下期から徐々に景気が悪化、加えてコロナ禍で数値目標の達成は厳しいが、中計で掲げた『高機能・独自製品の上場弾力確保』や『生産性向上と働き方改革』など五つの基本方針は計画通り進んでいる」

— 生産性向上・能力増強に向けた国内2工場の設備投資の進捗よくについて。

「東大阪工場の自動酸洗設備は完工した。次なるステップとして次工程の被膜ラインの自動化を進める。枚方工場の場合物流の抜本的改善を図った製品倉

— タイ精線、中国の耐素龍

精密濾機（常熟）、大同不銹鋼（大連）の現状は。

「タイ精線の19年2月期は売上高40億8700万円、経常利益2億1900万円、減収減益。足元はコロナ禍で日系自動車メーカー向け電磁ステンレスの生産量は落ち込み、日本国内事業と似た状況にある。設備面は電磁ステンレス工場建屋の拡張工事が完工しており、ニッケルめっきの新工場を年内に建設予定だ」

— 注力する分野は。

「環境・医療・エネルギー・IoT関連など幅広い分野での新製品開発・拡販に取り組んでいる。医療分野では医療用規格材料（INS304V）や高強度高耐食コバルト合金の開発・製造をしていく。エネルギー分野では水素発生モジュールや、水素分離膜モジュール、太陽光発電の効率向上に資する製品の拡販を目指す。IoT関連は半導体用超精密ガスフィルターに加え5G関連の需要を捕捉していく」

— アフターコロナに向けての取り組みについて。

「中国子会社では、いち早く中国国内向けが好調に推移し増収減益で、3期連続黒字となった。収益基盤の強化のため、熱処理設備を新設し、生産量・販売量増を目指す。クロム系ステンレス鋼線を生産する大同不銹鋼（大連）は、売上高4億8400万円、経常利益5100万円、減収増益、4期連続黒字となった。中国国内需要は回復し

環境・医療分野などで製品開発

国内外で設備投資進める

「Withコロナ」など外部環境は目まぐるしく変化しており、推移。また今年に入り、第5世代移動通信（5G）関連の需要が増えている。明るい兆しもあるが、新型コロナウイルスの第二波や

— 今期が第14次中計『NS R20』（2018～20年度）化している」

庫の新設は今年度中に完工・運用予定だ。また同工場では、ばね材の熱処理炉の能力増強、超精密ガスフィルター用メディアの生産性向上に向けた設備を強化している」

基盤を整えていく」（山浦 なつき）

※本記事は鉄鋼新聞社の承諾を得て掲載しており、著作権は鉄鋼新聞社に帰属します。